
黒の魔具師と翠の魔法師

右手に絆創膏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の魔具師と翠の魔法師

【Nコード】

N5962Y

【作者名】

右手に絆創膏

【あらすじ】

玄関を開けたら、家じゃなくて森の中だった。

親切なお兄さんに拾ってもらって、世界のことをいろいろ教えてもらった中学二年生の月代海里が、異世界ロシエリエから元の世界に戻ろう頑張って働いたり、卵を拾ったり、どっかの一族頭首を拾ったり、道具作ってみたり、餌付けしたりしたり、攫われたりしながら、たくましく生きる話。

とりあえず、拾ったり作ったりがほとんどなのはなんでだろう・・・？

初小説です。気まぐれに書いていきます。

森の中、進行中。(前書き)

初小説です。

森の中、進行中。

夏の日差しが照り付ける中、ガタゴトと揺れる荷馬車は、森の中の道を進んで行く。

舗装なんてされていない、茶色い土がむき出しの一本道に、四つの車輪が轍を描いては、巻き上げられた土が舞あがる。

この荷馬車に幌は無く、上を見れば青い空が見える。

時折ガタンツと大きく揺れる度に、振動がお尻に伝わるから、痛くて仕方ない。

そんな私は今、トット村というところから帝都というところまで、村に一つしかない雑貨屋を経営してるボブさんっていう、ひよろつと背の高いお爺さんなんだけど、その人の荷馬車に乗せてもらって、少ない荷物と一緒に荷台で揺られている最中です。

そもそも私が帝都へ行くのは、帝都中央国立図書館と云うこの国で一番大きな図書館で、元の世界へ帰る手がかりを探すためだ。

はい、ここで説明。

元の世界って何よ？って普通は思う所だけど、残念ながらこれは間違っても比喻でもなく、そのままの意味です。

なぜなら私が今いる世界は……

異世界だから。

あ、イタクナイヨ？真面目デスヨ？ほんとのほんとに異世界だからそれを説明するのには、十日前までさかのぼって説明しないといけないんですけどね。

なぜなら私が世界へ来た日が、ちょうど十日前だからです。

森の中、進行中。(後書き)

プロットっぽいものはあるけれど、大まかにしか決めてないので、
カメラ更新になる可能性大です。誤字脱字連絡お願いします。

回想してみる。(前書き)

二羽目、じゃなくて二話目。

回想してみる。

その日はいつもと同じで、学校からまっすぐ家に帰った。

いつもと違うのは、明日から夏休みだから帰宅時間が違うだけ。

午前中で終業式が終わったから、現在炎天下の中を帰宅中。

アスファルトの道路は、夏の太陽光に照らされて、ゆらゆらと景色を歪めてる。

できるだけ日陰を選んで歩きながら、私は真っ直ぐ家を目指す。

時折すれ違う近所の人に挨拶して、もらった成績表もそんなに悪くなかったから、私は母にどうやってお小遣いアップを交渉するか考えていた。

帰り道は一人だけど、別に友達がいらないわけじゃない。

友達は部活が午後からあるからって、お弁当持参で学校に残ってるから一緒に帰らないだけです。ほんとです。

剣道部には何回か勧誘されたけど、母方の祖父ちゃん家の道場で習ってるので、却下です。

別に止められてないけど、真剣にやりたいわけではなく、趣味の一つ程度ですので、部活には入りません。

部活は入ってない代わりにってのはなんだけど、家に帰れば家の手伝いが待っている。

家の手伝いと言うのは、両親が経営している喫茶店の手伝いのこと。そこそこのお値段で結構おいしいと評判ですが、今どきのオシャレなカフェとかじゃなくて、ちょっとばかり西洋風なレイアウトの喫茶店です。

壁に剣とか盾とか飾ってあるから、西洋風と言うより西洋館風みたいな？かんじかもしれないけど、洋食店ではなく喫茶店です。

大事なことなので、二回言いました。

コーヒーとか紅茶は父が淹れて、料理は母が作るっていつ分担をし

てますが、時々料理は父も作ります。

うちの父は、何気に料理上手いので、近所の奥様方には人気です。母の尻に敷かれてても。

私は父も母もどっちも見て覚えて、ついこの間、父に紅茶の味に合格をもらえたばかりなので、張り切って紅茶入れてます。

母には料理を教えてもらって、夕飯とかを一緒に作ってる。

市販のレトルト使うと楽だけど、一から作って自分の味を見つけるのが結構楽しい。

将来は料理人になるかと言われると、そこまではしたいわけではないので、これも趣味の一つだと私は思ってる。

将来のことはまだ良く分からないけど、喫茶店を手伝った分だけアルバイト料代わりにお小遣いが貰えるんで、夏休みとかは稼ぎ時ですよ。

もうじき下の双子兄妹の誕生日だから、なんか買ってあげたいし。そんなことを考えながら歩いていると、家が見えてきた所で灰戸さんに会った。

「よう、海里。今帰り？」

「ただいま灰戸さん。今帰りー」

灰戸さんは、母方のお爺ちゃん友達で、母の友人の旦那さん。

永遠の三十歳とか言ってるけど、見た目から五十歳に見えないので、初対面人は騙される。まじで三十歳くらいに見える。

身体つきも逞しいっていうのか？友達のとこのお父さんみたいにお腹出てないどころか、腹割れてるからすごいよね。

うちの父もそうだけど、友達がうらやましいって言ってた。その辺は自慢する。大いに自慢する。父かっこいい。尻に敷かれてても力ツコいいよ。

「灰戸さんはどうしたの？父も母も喫茶店の方にいるとおもっけど、家の方に用事？」

と訊ねたのは、灰戸さんが喫茶店側じゃなく、家の玄関がある裏側に居たから。

いつもは喫茶店の方に顔を出してるのに、こっちにいたからどうしたのかと思ったのですよ。なんかやったのかな？

「謝ったら許してくれると思いますよ？」

訊いてみたら、いつもなんかやってるような言い方すんなって怒られた。

「それに、今回はまだやってない！」

と胸を張って言う灰戸さんだが、胸張って言うことでもないと思う。というか、まだ、なんだ。これからなんだ。

「じゃあどうしたんですか？」

何やるつもりなのかも含めて再度訊ねると、灰戸さんに頭を撫でられた。

「うえあー！」

グルんグルん首ごと回す感じで。

「なにんすんですかー!!」

おかげで髪グチャグチャで、首が痛いじゃないかと講義をしようとしたら。

「
」

「え？」

「なんでもないよ。それじゃあな！」

「ちょ、灰戸さつ、あー！」

最後におでこを指で押されたけれど、それだけ言って灰戸さんは帰っていった。

おでこをさすりながら灰戸さんの後姿を見送って、さっき言われた言葉を思い起こそうとしながら玄関度ドアを開けた。

そこに広がっていたのは、見慣れた下駄箱ではなく、フローリング

の廊下でもなく、太陽光をいっぱいに浴びた青々とした草の絨毯。

私の目の前には、緑色が綺麗な森が広がっていました。

なんでやねん。

回想してみる。(後書き)

そのうち人物図鑑とかできたら書きます。

もう少し回想する。

目の前の森にしばらく意識が行っていたけど、戻ろうにも背後にあるのも森で、手に握っていたはずのドアノブの感触も、あれだけ暑かった太陽光も感じられない。

あるのはただ、目の前の森と、太陽光が降り注ぐ緑の草とちょっとした花、時折頬をかすめる涼しげな風である。

「……森？」

言葉にすることで、ようやく認識できた目の前の光景と現状の不可解さ。

うん、異常事態。

肩掛け鞆の重みで肩が痛くなったところ、「ええー……」と呟くだけ呟いて、とりあえず地面に座った。

すっかり感触がある草花、じりじりと太陽光に焼かれていた黒髪は、木々の木陰に入ったおかげか、少し冷めてきている。

幻覚でも妄想でもなさそうな予感に、ほんと、どうしたら良いのか分からなくなる。

家に帰ってきただけなのに、何がどうなったってこうなったのか。自分が一体何をしたと言うのか。

さっぱりわからなくて、どうしようかと考えていると、後ろから声を掛けられた。

「そこで何してるの？」

聞きなれない言葉に、自分の耳が一瞬おかしくなったのかと思っただけ、振り向いた先に居た青年は真っ直ぐに自分を見ていた。

彼の容姿を見て、それから少し視線を下に向けて、目を見開いてもう一度見て、さらにもう一度見て。

「……ま、まいごです。すみません」

出てきた言葉にも驚きはしたけれど、そのままの流れで頭を下げて謝った私。骨の髄まで日本人です。

「迷子って・・・なんで謝るの？」

少し困ったような声で言った青年は、明るい茶色の短髪に緑の瞳と外国人のような容姿に、白いシャツ、黒のズボンに革の靴と、探せばいそうな出で立ちをしていた。

けれど、決定的に違うものがあつた。一般では見かけない、けれど見慣れたもの。

頭を下げた謝ってしまったので上げるタイミングが掴めなかったけれど、草を踏むわずかな音が近づいてくるのが聞こえる。

「見かけない子だね？村の子じゃないみたいだけど、どこから来たの？親は？」

矢継ぎ早に訊ねてくる青年は、見間違いでなければ、鞘に納まっているけれど一振りの剣を腰から下げていた。見た限りでは長剣だと思ふ。

店に飾つてあるのと、とてもよく似たものです。なまじ本物が家にある分、偽物に思えない事が悲しい。

あれが偽物だと言うより、本物かもつていう思いが強いのだ。

いや、まあ。自分の家にあるものが、他人様が持ってないわけではないと思ふのも理由の一つだけだ。

安全な日本では、長物の持ち歩きは厳禁だし、ハサミですら下手な持ち方したら銃刀法違反で捕まるくらいだ。

あれが偽物である可能性の方が、はるかに高い。

ここが日本ならば。

大っぴらに持ち出していいものではないことくらい、中学生の自分にもわかること。

彼くらいの（見た感じでは18歳くらいだろうか？）青年が分からないはずもない。

それでも持っているということは、一瞬だけ木剣かもしれないと思つたけれど、ちらりと見た先にある青年の足は、長剣を下げた側だけ反対側より上げられていない。

つまり、そちら側に重心が偏っているということだ。

木刀じゃないかもしれないという思いが大きくなるが、あえて空気読まない発言を試みてみた。

青年に「すみません、コスプレですか？」と訊ねてみたが、あえなく玉砕。「こつぷれ？」と首を傾げられたので意味が通じてない様子です。

こつぷれってなんだよ。

言葉が通じないと言うより、「コスプレ」の意味が分かってないように思われます。

え？ほんとにコスプレじゃなく？まじプレ？リアルですか？そうですか。

予想はついてたけど。

まあ、言葉自体は通じてるんです。そこは良かったと思います。

なぜなら、彼が話しているのは聞きなれた日本語じゃなく、聞いたこともない言葉だったから。

それなのに会話が成り立っているのは、彼が日本語を理解しているからでなく、私が話しているのが日本語じゃないからです。

何時からバイリンガルになったんだ、私。

とまあ、そんなことは置いといて、結局考えが追い付かなくなった私が取った行動は、

ぎゅ〜・・・

タイミングよく小さくなっただお腹を押さえて、「お腹空いた・・・」と呟いただけだった。

考えるのを放棄しましたが、なにか？

「・・・家に来る？」

そんな私がかわいそうだと思った青年（リアルさんと言っらしいよ）は、私を自分の家に招いてくれて、昼食をごちそうしてくれた。

ありがたかったですが、・・・味のコメントはしたくないで

す。

ああ、でも、御馳走になったんですから、ちゃんと残さず食べましたからね。

ごちでした。うん。

回想終わり、でもまだ森の中。

ご飯を出される前にリオールさんに名前を聞かれたんだけど、私が「月代です」といつもみたいになんか名字で行っちゃったんだよ。

あれ？もしかして下の名前の方だったかな？とか思ったら「ツキヨーロ？」と言われた。

あえ？

「いえ、月代です」
ともう一度言つと「ツクシヨー？」とか言われた。

あるえ？

少し変えるとあれだね、今の私の気持ちになるよ。チクチヨー

何度か言い合う内に「ツクシロ」に納まりました。これも言い難そうだったけど。

これ、「海里」だと何に変換されるのだろうか？ダメージ喰らいそうで怖くて言えない。キャリアとか呼ばれたらイヤすぎる。

「あたしキャリアですv」とか？いやだ。恥ずかしくて死ぬる。

というわけで、しばらく「ツクシロ」で通したいと思います。精神安定のために。

コスプレの時もあれ？と思つたけど、微妙に通じないよね。

なので、言語的に私が知らないだけで、世界は広いからちょっとだけ期待を込めて国の名前とか、大陸の名前とか聞いてみたら、もの見事に知らないものだった。

だって、「ここ？ヴェルドナ帝国だよ」とかすで言われた拳句、なんで知らないの？みたいな顔されたら、何時までも世界は広いねと

か言つてられない。

現実逃避したいけど、させてくれなさそうですね。

大陸名はローザンディエスト大陸らしいですが、私の名前より言いにくい？とか思いつつ、世界地図にそんな大陸は無いよね。

「日本つて知つてますか？」

「ニオン？聞いたことないけど、その村に住んでたの？」

村つていうか、国なんだけど、聞いたことないつて。確かに小さい島国だけど、それなりに有名だと思う。

ドッキリかなーとか思ったけど、ただの中学生にここまで大がかりな仕掛け使わないと思うし。思いたいし。謎言語を話してる自分自身の説明つかない。

そのあとはリオールさんの親御さんからも、再度親のこととか聞かれたけど、答えようがなかった。

「気が付いたらあそこに居た」「両親はたぶん生きてます」とは答えただけど、後は今までどうしてたとかは「親といた」とか答えるけど、どこに住んでたとかは「分からない」で通した。

異世界から来ましたー、なんてことは言えない。

頭イタイ子になっちゃう。なんて危惧して黙秘権執行したら、聞いちゃいけないこと聞いちゃった、みたいな雰囲気になった。

その結果、冒険者の親とはすてられたぐれた迷子となりました。

なんでやねん。

という突込みをしますが、むろん、心の中で、です。

口には出さないのが、安全に生きていくコツだと思います。はい。

というか、冒険者つて・・・どこのRPGですか。ここのRPですね、ごめんなさい。

そんなことがあって、モグモグご飯を食べてる時に「ここで暮らしたい。うちには君と歳の近い子供もいるし、1人増えたくらい大したことないから」とリオールのお父さんのホロンソンさんが言

い出した。

帰る当てもないし、帰れる気配もないし、正直野宿とか怖いので、ありがたくお世話になることにしました。

ちなみに、リオールさんの歳は18歳でどんぴしゃでした。私すごい！だからなんだって言われたら何も言えないけど。

だけど、リオールさんやホロンソンさん、奥さんのレイーナさん（ぱっちりした目は綺麗な緑色で、猫毛なこげ茶色の髪を後ろで結んでる、すごく可愛らしい方）ほか、娘さん婦たちと息子さんたちに年齢間違えられてる気がする。

それが確信したのは、一番下のシリス君（10歳）とウイリス君（11歳）に対して、私が「・・・ツクシロです、よろしく」と言うのと、シリス君が「俺、今日から兄ちゃんになる？」とホロンソンさんに言ったから。

待つて、私13歳。君らよりオネイサンですよ？

そこだけは訂正した。3歳くらいのサバ読みを許されるのは、もうすこし大人になってからでお願いします。

妹が欲しかったというラナシスさん（17歳）とは、洋服を融通してもらったりと何かとお世話になりました。

そんなこんなで、10日間はあっという間に過ぎ去っていきました。速いです。

ご飯をあんまり食べないことに、ちよつと心配されてる感じがあつたけど、あれは、うん、不味くは無いだよ、うん。

お肉もスープも・・・いえ、作ってもらつたいて失礼だよ。うん。異文化コミュニケーションだよ。

まあ、それは置いて。

リオールさんが帝都という所に戻るようになりました。

何でもリオールさんは帝都にある軍学校に通われてる学生さんだそうですね。

その時に学校の話聞いたんですが、この世界、魔法があるそうです。あつはつはつ、ふぁんたじー。

しかも学校で教えてるらしいですよ。それを聞いて、もしかしたらって思わない方がおかしいです。

未練があります。家族仲は良好で、友達もいたんです。

魔法があるなら、家に帰る方法も見つかるかもしれないって思いませんか？

ただ、魔法には魔力が必要だし、学校に入るには15歳からという年齢制限と、すっごくお金がかかるそうです。

ぎゃふん（古）

ついでに、帝都の話聞いたんですが、すっごく大きな図書館があるそうです。

世界の本が集まってるとかいうくらい大きい図書館で、帝都国立図書館と言ったらいいけど、望みを託したいと思うのですが、どうですよ。

ただし、行く理由が必要です。

車なんかないし、旅費もかかるし。

どうしようかなくなって考えてたら、「親を探すためにも帝都の冒険者ギルドに一度行ってみたら？」とホロンソンさんが言ってくれました。

ああ、そういえば私の親は冒険者設定でしたね。

というか、冒険者ギルドって・・・どこまでRPG？

そんなわけで、帝都まで毛皮を売りに行くボブさんの荷馬車に揺ら

れています。

冒険者ギルドで探してもらって、ボブさんの仕入れが終わり次第、一緒に帰ってくる手筈です。

荷馬車なんて初めて乗ったし、馬なんてテレビで見たことがあるくらいで、実物は今荷馬車を引いているボブさんの馬が初めてだ。

私の住んでいたところでは、道はアスファルトで舗装されていたし、移動には車や自転車が使われていた。

でもここでは、移動は徒歩か馬、徒歩だと二日は掛かる隣町へは、バスでも電車でもなく荷馬車で移動する。

ふぁんたじー。

こちらでは珍しいという黒い髪が、太陽光を容赦無く吸収するのを防ぐために、ラナシスさんの茶色のスカーフを着用してますが、慣れないのでズレていないか確認します。

可愛いらしい花の刺繍が入ったこのスカーフは、髪の毛を隠す目的ではなく、同じく珍しい黒の瞳を前髪で隠すための物です。

残念ながらサングラスはないし、メガネは高いので直接隠せないの
で晒しているけど、スカーフで髪を隠すと見せかけて奔命は瞳の色
です。

そんだけ珍しいらしいのかと思ったけど、黒髪に黒目が珍しいので
あって、別々ならいるらしいよ。

延々と続く轍から視線を空に向ければ、そこに広がる色が瞳に写る。
高く清んだ青い色は、自分の知る夏の空とは少し異なっていて。

「…悪くはないんだけどね」

こんなに綺麗ではなくて、もう少しくすんだ色をしていたから、綺麗
といえば綺麗なのだが。

落ち着かない。

色々と。

ちらりと後ろを振り向けば、リオールさんとボブさんが何か話している。
現段階での私の保護者でもある人だ。

ちなみに、この帝国の半数はヴェルドナ人らしく、だいたい茶髪に

緑色の瞳をしているらしい。あとはナハルーン人と言って、茶色の髪に青い瞳らしいから、黒髪黒瞳な私はすこぶる目立つわけなのですよ。

黒髪なのは西にある国とか、南にある国の人らしい。紺色の髪に黒い瞳のセルゼット人が一番私に似てるらしいけど、山を越えた先の国の人だから、こっちにいるのは商人とか冒険者くらいらしい。

私の両親が冒険者っていう勘違いは、ここから来てるようですね。

「どうしたの？ツウ」

にこりと微笑みながら、リオールさんは私を呼ぶ。むろん、ツウとというのは愛称のようなものだ。

私の名前が聞き取れなかったリオールさんたちが、ツクシロもやっぱり言いにくいらしくて略された感じがぬぐえない。

「なんでもないですよ？それより、リオールさん。もうちょっと帝都の学校のこと教えてほしいです」

「学校のこと？いいよ」そういつて、こっちにおいでとにっこり笑うリオールさんはお母さんにですね。美人さんです。

女装させたらさぞかし綺麗に……って、やめよう。仮にも恩人なんだから。

というわけで、休憩地につくまでの間、帝都の軍学校のこととが、同級生の貴族らしくない貴族さんとかの話聞かせていただきました。

回想終わり、でもまだ森の中。(後書き)

ようやく改装じゃない、回想終了。
次は捨うと思います。なにかを。

異文化はしよせん異文化である。

休憩中。

お昼ご飯を食べるために森を抜けた街道で馬車を止めた。

朝の6時頃にトット村を出て、途中何度か小休止を取ったけど、太陽が真上に来たのでおひるごはんにしようということになった。

リオールさんとボブさんは馬用の水が入った樽を運んでいたのもので、その間に私はお昼ご飯の準備をする。

火とかは焚かないので、お昼にとレイーナさんが持たせてくれた包み紙と水筒を持って荷馬車から降りる。

草原があるので、下に敷く物は特にいらならしいから、近くの木陰に包み紙と水筒を置いた。

「リオールさん、ボブさん。お昼ここで食べましょう！」

私を手を振ると、リオールさんが気が付いて手を振り返してくれた。場所はそんなに離れていないから、手を振る必要もないんだけど、ピクニックみたいでなんか楽しいのではしゃいでしまう。

そんな私を見て、リオールさんは綺麗な顔に笑みを浮かべて「今いくよ」と答えてくれた。

ボブさんも心なしか温かい目で見てる感じする。なんか、こう、幼い子供を見るような？あ、ボブさんの場合は孫になるのかな？

なんかそんな感じで、私を見ながら微笑んでるから、なんだろう、ちよつと恥ずかしくなった。

座った2人に包み紙と水筒を渡すと、私も気を背もたれにして木陰に座り、包み紙を膝にのせて「いただきます」と小さな声で言う。

ここでは「いただきます」とは言わないらしい。初日に不思議そうに見られてからは、違いを見つけるたびにここが違う世界なんだと実感するようになった。

だから、あんまり違いを大っぴらにしないように、小さな声で言う

だけにしています。

そんなことをしてる間に、リオールさんもボブさんも包み紙を開けていた。

開けたのを見て、どんな反応するのかちょっと楽しみです。

実は、この包み紙の中身はレイーナさんがお昼のために用意してくれてたものに、私を手を加えたものなのですよ。

お昼には食べちゃうものだし、洗物減らすためにもいいんじゃないかなーって提案したら、レイーナさんが手を加えさせてくれたんです。

心広いよね！

反応を横目で見ていると、包み紙を開けたリオールさんとボブさんは、ちよつと驚いていた。

焼いて塩を振っただけの肉とレタスっぽい野菜に、茹でて小さく刻んだ野菜とマヨネーズを和えたタルタルソースを掛けて挟んだ黒パンのサンドウィッチです。

人様の家の台所を荒らすのは躊躇われてたけど、食用油あったし、ワインビネガーっぽい物もあったので、マヨネーズ作れないかなーって作ってみたらできた。

胡椒が無いのは残念だけど、塩味のみ肉と茹で野菜に黒パンという定番からの脱出に成功しました。

マヨネーズは正義です。太るけど。それと、昼の洗い物を少なくのにも成功というわけです。

驚いた顔見て、ちよつと成功かなーってニマニマしながら、私はサンドウィッチを両手で持ってたぶりついた。

マヨネーズ、うまー。

久方ぶり、というか十日ぶりのマヨネーズの味を堪能していると、隣から視線を感じました。

なんだろうかって振り向くと、さっきとは逆で私が見られてた。なして？

「どうしたんですか？」

「いや、その、いつもと違って驚いたと言っか、これ、もしかしてツウが作ったの？」

「はい。洗い物少ない方が良いと思って一緒にしてみました」

「おいしいですよ？」と勧めてみると、リオールさんとボブさんはお互い顔を見合わせてから食べ始めたんですね。

「そこまで変ですかね？パンに挟んだだけなのに。」

「味はレイーナさんが味見してくれたので、十分保証できますから。」

「そう思ってみてたら、二人とも食べた後に目を見開いてました。」

「じつとサンドウィッチを見てます。そして、もう一度「ツウが作ったの？」とリオールさんが訊ねて来たので頷きました。」

「口にサンドウィッチ入ったので、ちゃんと飲み込んでから「私が作りましたよ？」と答えます。」

「この白いソースは何かのう？」

「ボブさんが言う白いソースは多分マヨネーズですよ。あれ？タルタルソースって答えればいいのか？マスタードは行ってないからタルタル言わないか？」

「・・・マヨネーズです。卵と油とビネガーで作ったソースに野菜を細かく刻んで混ぜてあります」

「マヨネーズ？初めて聞くのう。嬢ちゃんの故郷の料理かね？」

「ボブさんはサンドウィッチをめぐりながら聞くけど、こぼれますよ？まあ、故郷の料理と言われればそうなのかもしれないけど、発祥地は日本じゃなかった気がする。フレンチだったっけ？たったらフランスなのかな？調べたことないからわかんないや。」

「とりあえずわかんないので首を横に振つといた。嘘はいかんからね、嘘は。」

「そうすると、ボブさんとリオールさんは、あつて何かに気が付きましたって顔になった。そして、少しだけ暗い雰囲気になった。なぜ。」

「どうしましたか？」
「訊ねてみると、リオールさんが私を見ながら・・・あ、目をそらした。」

「あ、あの、ツウ？」

呼ばれたので「はい」と返事をしてみれば、「おいしいね」と、笑顔をひきつけて言ったので、多分口に合わなかったんだと思います。ポブさんは「ワシこれ好きじゃよ」と言ってくれました。

どうやらこの世界の人と私とでは、味覚が違ふようです。残念です。異文化の壁、突破ならず。まあ、でなければもう少し料理文化も進んでると思います。いらん世話でした。乙。

ああ、そうなるならレーナさんにも無理させてしまったのでしょ。やっぱりよそ様の家庭の味へは不可侵条約を結ばねばなりませんね。「ありがとうございます」そしてごめんなさいと心で謝って、サンドウィッチの残りを食べるのに集中した。

不味いならまずいと言ってもらいたいような、彼らの優しさに申し訳ないような思いでいっぱい、残りのサンドウィッチの味は良く分からなくなってしまうました。しょぼん。

ここでもう少し休憩することなので、はぐれないようにしながらあたりを散策させてもらうことにしました。

この辺には凶暴な獣とかは出ないそうです。盗賊とかもないそうですので、その辺は安心していいそうです。

しかし、少し森に入るともしかしたら居るかもしれないので、遠くに行かないように言われました。

獣に対して出没しないとよと言えるのは、川とかの水場が無いかららしいですが、その代り水の補給も出来ません。

語弊がありました。森の奥の方へ行けば水場はあるそうですが、本当に奥なので、という意味です。そして、そこまでいなくても今日中に隣町につくので問題ないそうです。

歩くと二日かかるのに、馬車だと一日で着くからすごいよね。馬。

いつか騎乗してみたいです。

というわけで、ちょこちょこ馬車が見える範囲で森の中へ入ってみます。

異文化はしよせん異文化である。(後書き)

拾う前に遭遇したようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5962y/>

黒の魔具師と翠の魔法師

2011年11月20日21時40分発行